

当たり前のことが どこか美しく見えた

——岡田恵和『泣くな、はらちゃん』論——

若林 文

はじめに

脚本家、岡田恵和（おかだよしかず）と聞いても誰なのかわからない人は多い。しかし『ビーチボーイズ』『彼女たちの時代』『ちゅらさん』『最後から二番目の恋』『スターマン・この星の恋』など、彼が手がけたドラマの名前をあげると「ああ、その人ね」とわかってもらえるだろう。

岡田恵和は一九九〇年代から活躍し始め、コメディものや恋愛ものを数多く手掛けている。また日常に潜んでいる美しいことやおもしろいこと、人を輝かせるものをドラマ中で描くことを得意とし、観る側の心を温かくさせるようなドラマを多く生み出し、人気を博している脚本家である。研究者やコアなテレビファンでない限り、脚本家に目を向けることはあまりないかもしれない。しかし、映画やアニメ、テレビドラマというものは映像であるから、その出来栄えは監督や演出の影響があるにしても、すべてのドラマはシナリオから始まり、土台を据えるのは脚本家である。わたしは岡田恵和の手掛けたドラマに魅了された。わたしが卒業論文のメインテキストとして選んだのがその中の一つ『泣くな、はらちゃん』である。このドラマを岡田恵和自身、「いいドラマ」で「自分の代表作になった」と語っている（1）。

『泣くな、はらちゃん』は二〇一三年に日本テレビの土曜ドラマ枠で放送された全一〇話のドラマである。主人公の越前さんは、日々の恨み辛みをこめて日記代わりに漫画を描いている。その漫画の主人公ははらちゃんはいつも暗いことばかり言わされて悲しく思っているが、ある日突然漫画の世界から越前さんのいる現実の世界に飛び出してしまふ。初めて見る世界の素晴らしさに、はらちゃんは感動しながら、消極的な越前さんの心を動かし、そして二人の恋物語が進展していく。

ドラマ中では、登場人物がメッセージ性のこもった発言をするシーンがたびたび出てくる。メッセージ性の強いものを聞くと台詞っぽく感じ、観る側は白けてしまいがちだが、このドラマはそれを感じさせない。観る側が素直にその言葉を聞いてしまう魅力がある。このドラマを主に分析しつつ、脚本家岡田恵和の描くドラマの特徴について考えていきたい。

なお、テキストの引用は、『泣くな、はらちゃんシナリオ Book』（二〇一三年三月、日本テレビ放送網株式会社）を使用し、論中では『泣くな、はらちゃん』（第●話●項）と表記する。また、一部の内容は実際にドラマで用いられた言葉に適宜変更する。

第一章 先行資料

岡田恵和についての先行論文は数が少ないため、岡田へのインタビュー記事や自身のドラマ批評も取り上げていく。

まず、岡田恵和が描くドラマの作風には、大きく分けて二種類ある。それは日常や人物の感情をリアルに感じさせる人間ドラマと漫画のようにキャラクターが濃い人物が出てくるドラマである。これについて成馬零一はこう述べている（2）。

一つは『若者のすべて』（九四年）から『最後から二番目の恋』（一二年）に連なるリアル志向のオリジナル作品。もう一つは『南くんの恋人』（九四年）から『泣くな、はらちゃん』（一三年）、『スターマン・この星の恋』（一三年）に連なる漫画原作、あるいは漫画やアニメのエッセンスが盛り込まれた「キャラクタードラマ」の流れだ。

「キャラクタードラマ」とは著者成馬の造語で、漫画やアニメを原作としたドラマ、漫画やアニメのように登場人物のキャラクターを濃く描いたものを指している。『泣くな、はらちゃん』では、映像のなかに漫画のコマがシーンとしてそのまま用いられる。そこからはらちゃんは漫画のキャラクターのまま現実に現れるため、設定も人物も現実離れしている。

これらのことから『泣くな、はらちゃん』は、キャラクタードラマといえるが、そこで描かれた人物は決して嘘の人間像ではない。キャラクタードラマは人物をキャラクターとして描くことで、より人間らしさを表現するという手法であると成馬は述べている。岡田の持つ二つの作風はまったく違うものに見えるが、目指すところは同じである。それを用いて岡田は人間ドラマと同様に「人間」とはどういうものかを描くことに徹底しているのである。この岡田が描く人間らしさとはなにか、後ほど言及していく。

次に岡田恵和はどのような思いで作品を描いているのかである。自身著の『TVドラマが好きだった』(3)では、いくつかの名作ドラマをあげながら、脚本家としてどのようなドラマを描きたいかが書かれている。その一つに山田太一の作品『想い出づくり』を取り上げている。そこでは演出家大山勝美の「つまらない人間のつまらない日常を、いかに面白くリアルに描くか、これがテレビドラマの役割なんです」という言葉をあげながら、人の暮らし、生活を描いたドラマが必要である、ということと述べている。岡田恵和は自身でも山田太一を尊敬し、彼の影響を受けていると、いくつかの記事でも語っている。起承転結などないようなありふれた日常をおもしろく描くことは、岡田恵和のいくつかのドラマで特徴になっていると思える。また続きにはこうある。

私の中で名作と考えるかどうかの基準の中で、これは重要なポイントである。答えのないところ。(中略)

答えなどない、それは視聴者一人ひとり違うはずだ。説教臭いドラマではダメなのだ。

そして、もう一つは、むずかしいことをむずかしく描かないこと。むずかしいことを、むずかしく描くのは言ってしまうれば簡単なことなのだ。それはテレビの役割ではないような気がする。

『想い出づくり』は、笑えるのだ。コメディだというのはない。笑わせようとし

ているのではないところで、笑える。これは素敵なことだと思う。だが、むずかしい。

これは二〇〇三年に語ったものであり、昨今の岡田のドラマではこれらの思いが反映されていることがわかる。一つ例にあげるならば、『最後から二番目の恋』(二〇一二年)である。恋、恋愛とはなにかを主人公が明確な答えを見つけないで描くのではなく、物語全体を通して登場人物がそれぞれの恋の形を見せてくれるようなつくりになっている。そしてセクシャル面も生々しくならない程度に描かれている。また、このドラマの見どころとなっているのが会話のシーンである。特に主人公がお隣さんと皮肉に皮肉で返し口げんかになる場面はとてもおもしろい。『最後から二番目の恋』において会話のシーンが多くなったことについて岡田は、朝ドラを担当した直後にこのドラマを手掛けたことを理由にしている。朝ドラはテレビ放送だけでなく、ラジオ放送も行われているため、言葉だけで視聴者に物語が伝わることが大切である。岡田は、朝ドラでは放送時間的に視聴者が落ち着いて観ることができないため、基本は会話劇とナレーションの補足で内容がわかるようになっていく。そこから、このドラマでもできるだけの会話劇に挑戦したということと語っている(4)。

本当ならば第三者からみて何がおもしろいのかわからないようなこと、でもこういうことよくあると笑いながらうなずいてしまうようなこと、それをドラマにしようことは、岡田恵和の特徴ともいえるのではないだろうか。

続いて『泣くな、はらちゃん』がどういう物語であるのかを成馬零一は、岡田脚本のキャラクタードラマ『南くんの恋人』(一九九四年)と比較しながら述べている。『南くんの恋人』では身長一六センチというアイドル的なヒロインが出てくるが、何の伏線もなく最終話で死んでしまう。この話では、ヒロインの存在が漫画やアニメのキャラクターに近いものである。ゆえに、ヒロインが死ぬことは、人は永遠にキャラクターとともに生きていくことはできず、いつかは現実と向き合い別れなければいけないことを暗示しているのではないか。そして『泣くな、はらちゃん』でも同じ二人は結ばれない終わりになっているが、テーマはさらに

複雑なものになっている、と論じ、こう述べている。

はらちゃんの思いは、彼が越前さんを絶対に裏切らない（気持ちが変わらない）キャラクターとして設定されているからであり、彼には越前さんを嫌いになるという自由意志は備わっていない。

『泣くな、はらちゃん』を見ていて、心が和むと同時に強い痛みのようなものを感じるのは、きっと、これから現実化するであろうキャラクターと人間との関係というものが、とてもせつなく残酷な現実と、絶対に揺るがない主従関係を背景にしているからであろう。

果たしてそうであろうか。いつかは現実と向き合わなければいけないというメッセージが込められているという見方が出てくるのだとしても、はらちゃんに自由意志が備わっていないものとしてみることにわたしは賛同しかねる。

さらに続きで成馬は、『泣くな、はらちゃん』と『スターマン・この星の恋』（二〇一三年）は裏表の関係にある作品であるとし、『スターマン・この星の恋』に関してこう論じている。

身体の動きはグロテスクに誇張されており、首が一八〇度回転する場面もある。文字通り生身の人間の身体を漫画／アニメのキャラクターのように取り扱うことの暴力性が描かれており、これは堤と岡田が今までやってきた表現に対する自己言及のようにも見える。

そして現代社会にある人工知能がより発達し、はらちゃんのようなフィクションのキャラクターが現実にも現れたとき、人間は受け入れることができるのか、現実とどう向き合っているのか、『泣くな、はらちゃん』や『スターマン・この星の恋』は問いかけているのだ、と分析している。

これらの作品が裏表の関係にあるということには賛同できるが、裏表の関係にあるという根拠が薄く感じるため、『泣くな、はらちゃん』を分析するにあたって『スターマン・この星の恋』と比較しつつ、ドラマいくつから共通のテーマを見つけ、彼の描くドラマの特徴を探っていく。また、『泣くな、はらちゃん』がどのような優れた作品であるのかを、物語のジャンルを踏まえつつ分析していきたい。

第二章 作品論

* 世界とセカイ

この作品では「世界」という言葉が多く用いられる。漫画世界を指すはらちゃんの「世界」、越前さんの思っている現実の「世界」、越前さんが輝かすことのできる「世界」と、さまざまな「世界」が物語で提示され、わたしたち聴衆に考えさせるような「世界」という言葉のレトリックが施されている。

はらちゃんが最初に目指していたことは、自分のいる漫画世界を明るくするために神様を明るくするということであった。

はらちゃん「お願いです神様！ 世界を変えてください！ あなたが笑えば、世界は輝くんです！」

（第一話四八頁）

この「世界」を文字通り越前さんは地球全体の世界だと思っている。はらちゃんが言ったことへの誤解が生じ、越前さんは、はらちゃんを自分に対して過信する変な人ととらえてしまう。そこから越前さんのビルディングストーリーは始まっていく。

この「世界」について考える際に「セカイ系」というジャンルに少しふれて考えてみる。「セカイ系」というのは二〇〇〇年代からサブカルチャーの中で流行したジャンルである。

主人公にとっての他者を含めた「世界」と、自分と自分が好きな人だけの「セカイ」がリンクしてしまい、主人公は自覚がなくとも、世界の命運を握ることになる。また、世界の平和を守るのは人間ではないロボットや超人の美少女であり、当の主人公はいたって平凡な無力な青年である場合が多い。少女は青年になんの理由もなく好きであるという全承認の状態であり、彼のいる世界を守るために少女は傷つきながら戦う。それゆえ青年が少女を守るという選択は世界の危機に直結する。青年は世界を犠牲にして好きな人とのセカイを選択し、純愛を手に入れるのか、彼女を戦わせ、世界の平和を手に入れるのか、決断できぬまま、物語は閉じる。「セカイ系」は、他者を受け入れずに自分たちが望んだ「セカイ」に閉じこもる、という人々の欲望を描いたものなのである。

木皿泉のドラマ『Q 10』（二〇一〇年）は、主人公がヒロインとの別れ、未来を生きる大勢の人々を守ることを決断することから、脱セカイ系の物語として描かれているが、『泣くな、はらちゃん』は主人公の世界に対する見方について、別の角度からのアプローチを試みた作品と言えるのではないかとわたしは考える。

『泣くな、はらちゃん』では、世界の危機という大きな問題には直結しないが、主人公の越前さんは、はらちゃんが現実の世界に出てくるところを知った後、自分が神様であることを認識し、漫画の世界を操る権利が自分にあることを口にしていく。また、セカイ系で時折みられる現実と虚構の世界、ここでは現実世界と漫画世界が出てくる。そして人間と非人間の恋がテーマになるといふ類似点からも、セカイ系と対応させることが可能である。

最終話で越前さんは自分と自分が好きな人たちだけのセカイ、漫画世界に入り込むシーンは、セカイ系によく見られる他者を除いた自分と好きな人だけのセカイに閉じこもることを彷彿させる。それを知った清美は越前の行動を勇気ある行動としてとるが、百合子はそれに対して「勇気なのかね、それは」という。越前さんの行動に対して、今までの世界で築き上げたものを捨てても、好きな人と一緒にいる勇気ある行動、ではなく、自分が嫌なものから離れるため、自分に降りかかる責任から逃れ、自分の望み通りのセカイに閉じこもる臆病な行動として受け取り、百合子は疑問を抱いたのである。そしてセカイに閉じこもる越前さ

んの行動は、それまで越前さんを全承認していたはらちゃんによって阻まれてしまう。越前さんは他者のいる世界への参入を自分で決意するのではなく、はらちゃんの説得を受けながら一緒に現実世界に戻る。そして越前さんは、自分の世界に片思いであることを認め、世界に参入することを決意している。

セカイ系は、片方の世界から逃げるために、もう片方のセカイへ逃げたいという描かれかたであるが、『泣くな、はらちゃん』では、各々に自分のいるべき世界があり、自分の世界を好きになるべきであることが描かれている。しかしおもしろいことに、別の世界に行き来することは否定していないことを、この作品の構造が示していると感じる。

この作品では、世界が浸食し合うという構造をもっている。まず、越前さんのいる現実世界は、はらちゃんたちが行き来することで、漫画世界と現実世界が浸食し合っている。そして漫画世界は、はらちゃんによって、荒田ヒトシのマンガが漫画世界に持ち込まれた。「ひとりじゃないぞ！オレたちもいるぜ！」という言葉をマキヒロたちが叫ぶシーンがいくつかある。このマンガが漫画世界の人物に影響を与えていることがわかる。さらに、視聴者のいる現実と越前さんの現実が浸食し合うような形になっている。第八話で、パートさんたちが仕事をサボり、ドラマ撮影を見に行く場面である。撮影現場に向かい「ゆういちろう」という名前をパートさんたちは叫ぶ。そこには、紺色のスタジャンを着てギターを背負う、はらちゃんを彷彿させるような俳優が映るのである。

現実逃避をすることは、悪いことではない。アニメや漫画、テーマパークのような人間が生み出す異世界も必要とされる。ただ、異世界に入った後は、自分のいるべき世界に戻る勇気が必要なのである。

この作品は、セカイ系のように見せかけているが、各々いるべき世界があることを示し、また越前さんが自分の世界で生きることを決意することを描いている。セカイ系に見られる問題を打破し、脱セカイ系の物語となっているのである。

物語終盤で越前さんが長沼さんを注意し、長沼さんが攻撃的だったときに越前さんは「戦

いは好きではありません。でも、防御はします。この世界を好きでいたいの。」と言った。越前さんは自分が好きになろうとしている世界を守ろうとするために他者と戦う決断をするのではなく、防御するという決意をした。これはまさにバトルロワイアル的要素を否定しているといえる。

決断主義である「バトルロワイアル系（バトルワ系）」の物語の特徴には、自分の選択と他の選択は戦わなければならないこと、閉じられた空間での戦いが強いられること、があげられる。主人公が決断しない「セカイ系」に対して、こちらは決断したからにはその自分の選択、居場所・思考・キャラクター・ポジションなどをなんとしてでも守らなければいけない、ということが主軸のポストセカイ系になる物語の型である。

職場という閉鎖空間にも思える場所で、越前さんはバトルを繰り返すこともできたわけだが、長沼さんの戦いに挑むという形ではなく、岡田は「防御はします」という言葉できれいにこの問題に終止符を打っている。さらにこの作品では職場という閉じられた空間を最終話で入社した大橋さんの息子によって壊している。

以上は、バトルワ系との比較である。バトルワ系の物語の問題点の一つに、正義がなにかわからない点がある。この正がなにか悪がなにかという点は、岡田自身も作品でよく描いていることである。これについては第三章で述べたい。

続いて注目するのは、物語における日常性についてである。越前さんが思う嫌なこととは、決して取り分け悲惨なことではない。日常レベルの嫌なことである。越前さんが理不尽だと思ふことの一つの原因である、長沼さんの越前さんに対する態度は、常にいじわるなのではなく、聴衆に、越前さんにシンクロさせるシーンでいじわるな態度である。一話ではらちゃん、越前さんが描く世界が最近ずっと同じような暗い状態であることを述べているように、越前さんは日常の嫌な面ばかり気を取られている状況であった。それをはらちゃんは、日常にある素晴らしさを思い起こさせてくれることによって、越前さんを変えていく。作品を観る時には、越前さんや清美などの主な登場人物にシンクロしてしまうため、起こっている

問題が日常の些細なこととして観にくい。しかし、少し距離を置いて観ると、職場の嫌なことや恋愛などの登場人物が持つ悩みはごく一般の出来事であり、『泣くな、はらちゃん』は日常を切り取って描いた物語であるということがいえる。

これは「バトルワ系」に続いて出てきた「日常系」の型に近いものがある。「日常系」の物語は、登場人物は大きな決断するということがなく、物語に大きな起伏がないまま進み、ひたすらおんびりとして終わることが特徴である。平凡な日常の中にも、楽しみはあることを認識できるのが良さであり、『泣くな、はらちゃん』はそれを生かした作りとなっている。作品では漫画世界と現実世界という大きな嘘の設定の中に、「日常系」の基本を持っているため、リアリティをもった感動をわたしたちに与えてくれるのである。

はらちゃんは、わたしたちにとっては日常にある当たり前になってしまったものに感動する。メロディ・さまざまな動物・食べ物・夕日などが一話ごとにくっつかあげられていく。また、「それはなんですか？」「あれはなんですか？」「どういうことでしょうか？」と、当たり前のことだが、わたしたちも考えてしまうようなことを聞く。そのように質問した、働くこと・死ぬこと・家族・恋・せつないなど、わたしたちの身近にあることが話のテーマとして取り上げられる。

また、個人に焦点があてられるため、一話と最終話で比べればわずかな登場人物たちの成長でも、成長した物語と取ることができる。

ここで越前さんの漫画の機能について、考えてみる。

人はストレスがたまつた時に、誰かにそれを話すことによってストレスをためないようになっている。いわば、言葉にストレスをのせて体から吐き出し、他人にストレスを流しているのである。この現象は精神分析学者フロイトのいう「転移」である。これを越前さんは言葉に出す代わりに漫画に描いて吐き出している。職場で嫌なことがあると帰ってすぐに漫画を描くが、そこでの語り口調は普段越前さんが人に見せるものとは全く異なっている。

また、ユングの元型の理論を踏まえて、漫画の登場人物について考えることができる。原

型とは人間誰もが自分の中に持っている、いくつかの性格のことである。

越前さんが描く漫画ノートの中のキャラクターの性格は様々である。越前さんの言いたいことを代弁し、正義感の強いメインキャラクターは、はらちゃん、すぐに「殺すしかないね!」という少し乱暴な面を見せるユキ姉、子供っぽいところのあるマキヒロ、意見は何も言わないけど「いい人」であるあつくん、ひたすら笑っている笑いおじさんがいる。はじめ笑いおじさんは、隅のほうではあるが描かれている。しかし、越前さんが職場で理不尽なことがあったときは、笑いおじさんの存在が忘れられている。第八話で笑いおじさんが越前さんになぜ自分が笑っているのかを聞いたときに、越前さんは答えることはできなかった。ここから、無意識のうちに笑いや明るさの要素を、セカイに含めていたことがわかる。

これらのことから漫画ノートの人物の性格はどれも越前さんの一面であり、越前さんのもつ原型を表しているといえるのではないか。

越前さんは、はらちゃんと出会い余計に不機嫌になったようであるが、自分の部屋の鏡に向かって笑顔になるうとする。バックには、はらちゃんたちが歌っている歌が流れている。すると漫画世界には光がさす。第一話ではらちゃんが述べた言葉「あなたが笑えば世界は輝くんです。」が文字通り映像化されている。これは物語の始まりにふさわしいエンディングである。他にも漫画世界が輝く場面がある。第五話で玉田工場長が亡くなり、玉ちゃんが漫画世界に加わりうとする直前である。越前さんは、心の中では玉ちゃんは生き続けることができることを理解したため、その心の和らぎの表れが輝きと考えられている。(しかし涙を流しながら描いているのは、玉ちゃんを漫画のキャラクターとして描くことで現実には存在しなくなったということを確認しているからではないか。)そして最終話。越前さんがはらちゃんと別れることを決心してから、漫画を開くのである。はらちゃんが元の場所に帰ったとき、漫画世界は輝いていた。

以上のことから越前さんの漫画ノートは越前さんの表には出てこないもう一つの面として機能していることがわかる。

この点を踏まえて登場人物の成長について考えたい。

第一話と第一〇話を対応させると人物たちの成長がうかがえる。越前さんは漫画に描いたはらちゃんのようにではできず、職場では自己主張がない人であったが、漫画に描くだけでどまるのではなく、職場で自分の主張を述べることができるようになる、という成長を見せられている。清美は変装をしながら、人気の少ないところで歌を歌っていた。そして田中にも自分の思いを伝えないままであった。しかし、そのままの姿で演奏し、田中に思いを伝えることもできた。そして、第三話でかまぼこを創作するのも拒んでいた百合子だが、矢東薫子として漫画の連載をスタートする。田中は「すいません」の口癖は直らないが、なにも清美には質問できない状態から会話することができるようになった。人間関係の成長である。

物語の最後の最後まで怠けているヒロシをみると、いくつかのビルディングストーリーが見られる中でヒロシは際立った成長が見られないように思える。最終話、朝食の場面ではらちゃんに「働いてないから、ご飯がおいしんですよ」と言われたとき、ヒロシは「まあな!」という言葉が発するまでに若干の間をいれて答える。今までのヒロシであれば肯定の言葉を即答していたであろうが、その間から、ヒロシの心が少し変化したことを感じることができ。しかしそれだけではヒロシが成長したと読み取ることは難しい。そこで注目するのが物語終盤に出てくるシーンである。ヒロシはこたつに入りながら漫画を描いている。題名は『はたらけ!ひろし』。一見、漫画を描いて一発当てようとしているのでは、と思えるが、そうではない。越前さんの作品である漫画を、越前さんのうちに秘めているもう一人の越前さんであるという見方をすると、ヒロシもまた、働いているもう一人の自分を無意識のうちに、漫画に描き始めたのではないか。働くことに向いていないと言っていたヒロシにとって、長い目で見ればそれは成長の第一歩であり、第一話の、考えはあるが漫画の中にとどまっている越前さんの状態にヒロシもなったものとして描かれているのではないか。

また、この作品において、涙を流すシーンというのは、印象的である。タイトルにも関係する、はらちゃんと越前さんの涙から、それぞれの成長をみるることができる。

作品の盛り上がりは、はらちゃんが涙を流すところに置かれていることが多い。普段わた

したちが泣かないような場面、食べ物・夕日・越前さんに対して、はらちゃんは感動して泣く。喜怒哀楽がはつきりした、とても人間らしいキャラクターになっている。越前さんの場合は、はらちゃんに心を寄せるようになった第四話から最終話まで、涙を流す場面が各回にみられる。

タイトルの意味が明らかにされないまま物語は進み、「泣くな、はらちゃん」は、第九話でようやく発言される。はらちゃんたちが現実の悪を知ってしまい、他の仲間が元の世界に帰りたいという。越前さんは自らノートをみんなの前に持ってきて、両思いであることをはらちゃんに告げ、泣いているはらちゃんに向かって越前さんは笑顔で言う。「ほら、泣くな、はらちゃん」。そしてノートを開き、はらちゃんたちを漫画世界へ戻す。越前さんは、はらちゃんと別れる決心がついたのかと思われた。しかし越前さんは、家に帰った後、漫画に自分を描きはじめ、祈るようにノートを開き、漫画世界に入ってしまう。漫画の世界に入った越前さんから「ずっと一緒にいましょうね」と言われ、少し間をあけてから返事したはらちゃん。みんなで歌い終わった後、「やー！」と叫び、笑顔のまま一筋の涙を流す。そこで第九話は閉じる。

このシーンはとても意味深である。ここで、はらちゃんが泣いた理由を考えるとすれば、自分の世界から逃げてしまった越前さんを見て、悲しんでいると考えられる。はらちゃんは自分の背後でユキ姉に語る、越前さんの消極的な言葉を聞いてしまっていた。そのことは、越前さんが語っている間に、はらちゃんの後姿のアップが何度かカメラで抜かれていることから読みとることができる。越前さんに「泣くな」と言われたにも関わらず、最後に涙を流したはらちゃんは、心に相当な悲しみを抱いたのである。「泣くな、はらちゃん」というタイトルから、最も重い意味を持つ、はらちゃんの涙に気づくことができるのだ。

この作品では雨とはらちゃんの涙がメタファーの関係にあり、この二つはリンクしている。雨がすべての人にとって悪い意味を持たないのと同じように、涙もすべてが悪い意味になるわけではない。はらちゃんの流す涙も、必ずしもマイナスの意味ではないのだ。

作品内に雨のシーンは、第一話と最終話に出てくる。始めて現実世界に来るときは、ただ

雨に濡れるだけで、防ぐ方法をもたなかったはらちゃん。かまぼこのおいしさに感動して泣いたシーンは、初めて見るはらちゃん感受性に視聴者を驚かせた。最終話では傘という、雨を防ぎ越前さんを守るアイテムを手に入れていた。この回ではらちゃんは、どのような場面でも泣くことはなかった。

雨を防ぐ手段を学んでいたと同時にはらちゃんは感情をこらえる事、つまり涙をこらえることを学んだ。一方、様々な経験を通して、感情において成長した越前さんは最終話、「愛」を知った前向きな、はらちゃんをみて涙を流す。越前さんは、悲しい気持ち以外のことでも、感情を表す方法として流す涙を知ったのではないだろうか。はらちゃんが感情表現を押える代わりに、越前さんは喜怒哀楽を表に出すようになったといえる。二人の涙は、違う仕方であるが人間としての成長を表し示していた。

これら人物の成長は、当人や周りの人以外にとっては、大きな変化でもなく、成長とも見られないほどの成長である。しかしこのようなわずかな成長こそ、リアリティをもって描かれているといえる。だからこそ、わたしたちは、大きな嘘の中にある小さな本当だとしても、心が動かされるのではないか。

以上の事から『泣くな、はらちゃん』は、セカイ系、バトルロワイアル系の問題点をクリアし、日常系の良さを生かした、優れた物語と言える。

つまらないありふれた日常が続いている、それは悪いことなのだろうか。第九話で百合子は越前さんに「ゆるいくらいでちょうどいいんだよ、世界は。不満があるくらいの方が」と語る。また、「別の世界ってのは、あるんだらうなって考えてるくらいが楽しいのかもな」「ああ、不満はどこにいてもあるんだらうしな」という笑いおじさん・玉ちゃんの会話。最終話の、はらちゃんが越前さんと共にノートを開き自分の世界に戻るときの台詞。「きつと、この世界にも嫌なことはあるんです。私のいる漫画の世界にも、越前さんのいるこの世界にも」。不満はあることを認めながらも、『泣くな、はらちゃん』では平凡な日常でも、それが素晴らしいものであることを、はらちゃんを通してわたしたちに教えてくれた。

自分のいるべき一つの世界は、神様からの言葉と悪魔さんからのメロディでできた歌のようである。はらちゃんも唯一知っている歌は、後ろ向きで暗い歌にもなれば、人を励ます歌にもなる。歌う場面やとらえ方によって、同じ歌でも印象は変化する。どんな立場にいても本人にとってはそれが日常である。その日常をどうとらえるか、どこに目を向けるかは自分次第。平凡な日常は、自分で嫌な世界にも、輝いている世界にも変えられることを、このドラマはわたしたちに教えてくれたのではないだろうか。

* 震災

『泣くな、はらちゃん』は、一話完結のような軸と、全体を通してはらちゃんと越前さんの恋の物語が進む軸がある。一つの話の終わりで展開されたことが次の回に続くこともみられるため、厳密には一話完結とは言えないが、『泣くな、はらちゃん』では、それぞれの回にタイトルがあるのと同時に裏テーマのようなものがあるように思える。そして『泣くな、はらちゃん』のドラマ全体のテーマが浮き上がるように第七話から最終話まで描かれている。ここで注目したいのが第八話「神様のナゾの真相」である。第九話「2人が選んだ結末」については、第三章で扱いたい。

第八話を分析するにあたって第六話の終わりにあるエピソードをまず取り上げる。

越前さんと両想いになれたはらちゃんだったが、現実の世界に出てくることが越前さんを困らせるということを理解し、自ら越前さんの前で漫画ノートを開き漫画世界に帰る。越前さんは辛い思い出を封印するかのようになり、漫画ノートを棚の中にするのだった。次は漫画世界でのことである。

ユキ姉 「二つあるんだよ、私たちが死ぬ可能性は」

はらちゃん 「……………」

皆、聞いていて……

ユキ姉 「一つは……漫画の中で殺してしまう場合」

あつくん 「え？」

マキヒロ 「……………」

笑いおじさん 「……………」

たまちゃん（ゴクリ）……………」

ユキ姉 「もう一つ……漫画を描くのをやめてしまう場合。つまり忘れられて死

ぬんだよ」

はらちゃん 「……………」

（第六話三一四頁）

第八話まで、はらちゃんたちは不安を抱えているが、越前さんは殺したり忘れたりしないことをはらちゃんに伝える。みんなが和んだ雰囲気の中第八話は終わろうとしていた。しかし、物語は新たな展開を見せる。はらちゃんたちが部屋で観ているテレビに映ったものは、戦争、飢餓、動物虐待などの衝撃的な映像、そして東日本大震災のときのものと思われる映像だった。

現実の悲惨な出来事を示す映像や震災の写真が出てきたことに対して、ネットでの意見は賛否両論である。物語がコメディタッチに描かれ、ファンタジーとして観ていたものに、急に現実的な問題が提示され、ノリについていけなくなった人や、重暗くなったことに拒否反応を示す人のコメントがみられる。一方で、現実的な問題や震災の写真を取り入れたことに対して肯定的な意見もみられる。

世界で起きている問題がわたしたちには過去のものになり、忘れることよってなかったことにされてしまうという現実をよく描いていたことが評価されている。わたしも、この意見に賛同である。この話では、忘れてしまったら自分の世界から消えたのと同じであることを強く描いている。

確かに、震災の映像は被災者に大きな精神的ダメージを与えるため、テレビ放送では流さない方向にある。震災から約二年、震災の映像は突如に流れた。DVD版では映像がモノク

ロになり、震災の映像はなくなっている。ドラマの際に静止画を使ったことも、恐らくギリギリの判断であったろう。このシーンを選んだのは、プロデューサーである河野英裕であり岡田は使用する映像に関してはノータッチであったが、岡田自身も、後に自分でこのシーンを考えたとしたらこのような選択をとったであろうと語っている(5)。

『泣くな、はらちゃん』では、何気ない日常が素晴らしいことを全体として描いている。そして、うれしいことだけでなく、悲しいことや辛いことなど、様々な思いを描くことで人間としての成長を見せている。わたしたちは、日常にある幸せを忘れては世界が開けないのと同時に、日常になりかけている世界の不幸もわたしたちは忘れてはならないのではないか。それは、世界にある幸も不幸も受け入れることによって、様々な観点から物事を見、人として成長できるからである。もちろん、不幸が人の成長に必要であると述べているのではない。「不満はどこにもある」ように、多くの人が過ごしている日常には幸も不幸もある。人を理解するには、不幸の部分も知り、悲しみを知る必要があることになるのである。

誰かが悪いわけでもなく偶然に起きてしまった痛たましい出来事、それをわたしたちは忘れるという手段で、悲しみから逃げてはいけないこと、そして、越前さんが日常を漫画に描くように、また亡くなった玉田工場長を漫画に描いたように、何か心に残る手段で幸も不幸も描くことが大切ではないだろうか。この一回の放送で用いられた映像は、大きな意味があったといえるのである。

第三章 岡田作品との比較

この章では、『スターマン・この星の恋』と『泣くな、はらちゃん』を比べ、また岡田恵和の他作品の共通点をあげ、岡田の描く作品の特徴に迫りたい。

* 『スターマン・この星の恋』と比較

『スターマン・この星の恋』は『泣くな、はらちゃん』の放送から四ヶ月後にフジテレビ

で放送された。

主人公の宇野佐和子は、自分の祖母と三人の息子たちと田舎に暮らしている。ある日の運転中、道に突然若い男が出てくる。青年の危険行為に怒ろうとして顔を合わせると、青年は顔立ちが良かったため、佐和子は一目惚れしてしまう。青年が記憶喪失だったことをいいことに、佐和子は青年を星男と名付け、息子たちの父親として同居させる。お互い心を寄せるが、実は星男は宇宙人だったことが発覚する。家族の絆が描かれながら、星男は宇宙に帰ってしまうのか、それとも佐和子たちと暮らしていくのか、不安を抱えたまま佐和子と星男の恋が進展していく。

『スターマン・この星の恋』は『泣くな、はらちゃん』と同じく、人間と非人間の恋が描かれ、物語は町の中だけで展開される。同じ年に同じような設定で作られている両作品は、姉妹作といえるのではないかと考えた。ここで、いくつかの比較できる点を挙げていく。

1 世界観

『泣くな、はらちゃん』の中にある、世界が異なるカップルは、はらちゃんと越前さん・マキヒロと清美である。はらちゃんとマキヒロが彼女たちに恋をする理由は、明確にはされていない。

ここで先行論にあげた成馬零一の、はらちゃんには自由意志が備わっていない、という問題に触れる。このドラマで、はらちゃんには自由意志がないものとして観るのはナンセンスであり、自由意志が備わっていないから神様を自動的に好きになる、という安直な考え方ができてしまう。確かに「はらちゃんは越前さんから「黙れ」と言われたら黙り、「抱きしめてください」と言われれば抱きしめてくれるはらちゃんである。

しかし、第二章でも述べたように、このドラマの良さは、はらちゃんたちが平凡な日常が素晴らしいことを教えてくれるところにある。はらちゃんたちは、越前さんたち現実世界の人と同じように、働くことから喜びを得たり、恋をしたり苦しんだり悲しんだりするのである。たとえ誰かが創った漫画の中の人間であっても、現実の人間のように自由意志をもって

いる、それが『泣くな、はらちゃん』の世界観であり、現実的な冷めた考え方を適応させるべきではない。はらちゃんは越前さんが神様だから好きになった、マキヒロは現実世界で初めて会ったのが清美だったから好きになった、という必然性を物語内で追求する必要がないのが『泣くな、はらちゃん』の世界観である。

一方『スターマン・この星の恋』では、星男が佐和子を好きになったことに関して、第八話で触れられている。自分が人間ではないと思ひ、宇宙から誰かが自分のことを迎えに来てくれると信じている白井祥子は、星男が地球に来た時に、実は自分のことを迎えに来たのに間違えて佐和子のもとに行ってしまったのではないかと佐和子に主張する。動物が生まれて最初に見たものを母と思うように、星男が地球に来た時に、最初に見たのが佐和子だったから、勘違いをしているという。佐和子は不安になり、その点について星男に尋ねるが、「犬のお母さんじゃないよ、佐和は。・・・僕も、佐和とずっと一緒にいたい」と星男は語る。

そして第九話、長男の大は現実的なことを佐和子に叩き付ける。「もつとちゃんと考えてよ！ お母さんが星尾さんのこと好きなのはわかるけど、好きなだけじゃだめじゃん。どうすんのこれから。例えば、保険証とか住民票とか、年金とか税金だつて払わなきゃこの星で暮らしていけないのに」。

『スターマン・この星の恋』は、現実的な問題を、登場人物に語らせることによって物語に取り込んでいる。

ロ エンディング

次に、エンディングについて注目する。両者ともドラマ内でおとぎ話の終わり方について、メタ的視点を含めて語る場面がある。第九話で田中くんは越前さんと清美に、おとぎ話について語る。

田中くん 「そういう話の終わりは、たいてい、元に戻るんです・・・」

(中略)

田中くん 「僕らに大切なことを教えてくれたりとかして・・・彼らは去っていく、大抵、そういう終わりなんです。ずっと仲良く暮らしましたっていうのはあんまりないっていうか、無理っていうか」

(第九話四一二頁)

この台詞はその通りに『泣くな、はらちゃん』の終わり方に反映する。はらちゃんと越前さんは両思いでありながらも、別れを選択する結末になっている。

『スターマン・この星の恋』でも佐和子はドラマではどんな展開になるのかを星男に説明するシーンがいくつかある。第六話で佐和子はこう語る。「おとぎ話には、現実に戻るっていう終わりがあるもんね。・・・そんなのわかってる。」

最終回で星男が自分の星に帰ってしまう、または死んでしまい、佐和子たち家族はもとの生活に戻るといふエンディングを迎えると思わせる。しかし、星男は死ぬことはなく、二年の時がたち、二人は離れず新たに生まれた子供とともに過ごしていくという終わり方になっている。

目非人間

『泣くな、はらちゃん』で他の世界から出てきた人として描かれているのは、越前さんの漫画から出てきたはらちゃんたちだけである。はらちゃんが自分たちの他にも違う世界から出てきた人はいるかを百合子に尋ねる。

百合子 「いるんじゃないかな」

越前さん 「？」

はらちゃん 「・・・」

百合子 「でも、その人たちは、皆、ただの変な人って思われてしまっただけで気付かれ

てないんだろうね、きっと」

『スターマン・この星の恋』では、星男の他にも人間ではない人が身近にいる。重田さんは星男と同じ星から地球に来ていて、祥子は彼らとは違う星ではあるが、三万光年先の星から地球に来ている。また、物語の中で宇宙人であるとはっきり描かれなくても、宇宙人またはその血をひいているのではないかと疑念を抱いて見えてしまう人物も出てくる。あらゆるところでバイトをしている眼鏡をかけた女性、視力が異常に高い安藤くん、節のスナックに現れた「シェ！」という宇宙人がいる。

この設定から『泣くな、はらちゃん』では描いてはいない、人間と非人間の共存を選ぶという選択を可能にしている。

似た設定のもとに描かれている、『泣くな、はらちゃん』と『スターマン・この星の恋』であるが、以上にあげた面で正反対に描かれている。これらの違いを出すことで、人間と非人間の恋を描くうえで出てくる設定の分岐点をみることができるといえる。

続いては、この姉妹作からなにを読み取ることができるといえるのか、また両者の共通点からどのような岡田の描くものの特徴がみられるのかについて述べたい。

メタ的視点

ドラマの中で、登場人物が視聴者に向かって、これはドラマであるということを作中で話してしまうようなメタ的視点、また、ドラマの中でドラマを作っているというようなメタ作品は、ドラマの小道具としてよく使われる。岡田作品にもメタの視点が用いられることがあるが、それはどのような効果をもたらすか。

『スターマン・この星の恋』第七話で、佐和子が星男に語る。「もしさ、観たドラマでき、好きになった男がさ、実は、俺は宇宙から来たんだっていったらさ、・・・消すね！もう観ない！」。これは、自分たちの様子を観ている一部の視聴者の気持ちに代弁しているよう

な台詞である。

『泣くな、はらちゃん』の話の構造がドラマの中の漫画の中のマンガ、というふうにメタ作品になっているようであるが、いくつかのシーンからも、メタ的視点があげられる。第八話で、ワイルドなマキヒロ、繊細なあつくんを見て、「・・・少女漫画には、どっちも必要なんだ」と清美は語る。そして次は最終話のシーンで、現実世界に帰ってきた越前さんとはらちゃんが、痴話げんかをしながら去って行ったときの会話だ。

清美 「まったくせつない話なんだか、コメディなんだかはっきりしろよ」

田中くん 「どう見てもコメディですよ、あの二人は」

(第一〇話四六二頁)

両者とも、異世界の人物がドラマに登場するという現実離れた設定を持っているが、そのような設定でも、多くの視聴者は登場人物に感情移入することができる。そこにメタの視点を入れ、現実とドラマの差異に関する現実的な問題を考えるような、視聴者と同じ視線を取り込む。すると、いったん視聴者は登場人物へのシンクロから解かれることとなり、感情移入できない視聴者のように、現実的なことを考えさせられる。メタの視点には、視聴者をあえて、作品から離れた位置に置く機能があるのである。

自分が見ている世界や物事から、いったん離れて第三者の位置にたってみるということは、日常にもよくあることである。ふと我に返ると、自分が正しいと思っていたことが、真の正解ではなかったということ、考えもしなかった他人の考えや見方が浮かぶこと。

第三者のように、いったんシンクロをやめ、落ち着いて観るとは、自分が見ていた方向とは別の角度から見ることになる。違う世界(他人)を受け入れにくいと思うことがあるのが当たり前であるが、それは他人にあたる相手も同じことなのである。

『スターマン・この星の恋』では、提供クレジットが流れるところに、作品に対する批判

的なコメントと肯定的なコメントの二つをあえて載せている。ドラマを視聴者がどのように感じるのか、佐和子が視聴者にどのように映るのか、そこでも、意見や見方が分かれることを明らかにしているようでもおもしろい。宇宙人や異世界の人のように、変な人に見えてしまう人も含め、自分が見ているものが、世界になるのである。そのように、自分で感じたものを正と思ってしまうが、時には自分を客観的にみることも必要である。

世界の違う人物を用いた二つの作品であるが、突飛な設定についていけない視聴者もいる。それでも、あえてあり得ない設定の作品を作り、人間それぞれの世界の違いをみせてくれる岡田の描き方はおもしろいと感じた。

* 見た目と中身の変化・キャラチェンジ

岡田の作品には、見た目は同じでも中身は全くの別人になってしまふものや、キャラクターを交換する、されてしまふものがいくつもある。

『天気予報の恋人』(二〇〇〇年)でキャラクター交換するのは、「唯川幸」としラジオDJとして活躍する金子祥子、そのラジオ局の食堂でアルバイトをし、夜はキャバクラで働く原田早知である。この二人は性格も境遇も正反対である。祥子は落ち着いている性格で、恋愛に対して奥手であり、昔から好きになった人は美人の友達に取られる。対して早知は天真爛漫で明るく、恋愛にも積極的になれる。ひよんなことから二人は好きな人やその周りの人に、早知がDJの「唯川幸」として、祥子がラジオ局のバイトとして扮することになる。

『スターマン・この星の恋』では、体の持ち主である達也と、その体に入る星男の二人である。達也は自殺したために一度死に、その体を星男が乗っ取る。物語の途中で達也の意識が戻るが、生前はヤンキーであったため乱暴で言葉遣いが悪く、佐和子たち家族は優しい星男との違いに驚く。そこで子供たちによって、達也の意識の時を「黒星男」、中身が優しい時を「白星男」と名付けられた。

『さよなら私』(二〇一四年)で中身が入れ替わってしまうのは、家庭を持ち専業主婦である星野友美と映画プロデューサーで独身の早川薫である。二人は神社でお互いの心境を打

ち明けるが、揉めてしまい、傍にあった階段から転げ落ちてしまう。目が覚めると、自分の意識が相手の体に移ってしまった。二人の境遇や性格は正反対である。

『泣くな、はらちゃん』では、玉田工場長と漫画世界に加わった玉ちゃんだ。玉田工場長は独り者で、百合子に思いを寄せていて、なんでも百合子の言う通りになってしまう。玉ちゃんは漫画世界で家族のような仲間恵まれ、主張性も持っている。現実世界に来た時は、自分勝手な行動が時折見られる。

いずれも、どちらの性格が良い悪いということはない。視聴者によってシンクロする対象が異なることも、もちろんあるであろう。

ここで『泣くな、はらちゃん』第九話を分析する。漫画世界から出てきたはらちゃんたちは一行は越前さんの家に泊まり朝を迎える。晴れている空を見ながらはらちゃんは「今日は外が明るいですね」と言ったところで、「いいお天気」と「悪いお天気」を越前さんに教えてもらう。

マキヒロ 「雨は悪いお天気なんすか？」

秀子 「うーん、悪いわけじゃないんだけどね、必要だしね、雨も・・・雨降ってもらわなきゃ困るし・・・雨が降るのを待ってる人もいるしね」

越前さん 「(頷く)」

ユキ姉は、なんとなく男たちに違和感を感じていて。

ユキ姉 「？」

あつくん 「悪いけど、必要ってことですか？」

秀子 「うーん、まあそうね」

(第九話四〇七頁)

さらに第九話で、はらちゃんたちは現実世界で不良たちから暴行を受けたことで、悪を知ってしまう。世界の常識を知らなかったはらちゃんたちからすると、不良たちは悪でしか

いが、ボールをぶつけられ、わけのわからないことを聞かされる不良たちのことを考えると、殴りかかった彼らが完全に悪であるとは言い切れない。

キャラクターの対比でも、二つの視点があることを考えさせられる点がある。

越前さんと清美は、作品の前半まではなかなか打ち解けられない。ここで当てはめられるのが、ユングの元型理論の中にある、ペルソナとシャドウの概念である。ペルソナは人前で演じている自分の性格のことで、シャドウは本人が無意識のうちに嫌う、自分の中にある性格で、人前では演じない像のことである。もし、人を見ていてその性格に嫌悪感を抱くのだとすれば、その人の性格は自分の中にあるシャドウと似ているという理論になる。ここで、次の場面をあげて考えてみる。

清美 「私、あなたみたいなのが、一番嫌い」

(中略)

清美 「やるんなら、ちゃんとやれって言ってます。嫌なら断れ。やるんなら

どんなものでも、ちゃんとやってください!! かまぼこの新作募集ポスタ

ーでも、ちゃんとやってください!!!」

(第二話九三〜九四頁)

清美はたびたび越前さんに嫌悪感を抱くが、それは清美にとっては越前さんが自分のシャドウにあたるからである。越前さんの臆病さや、人に物事をはっきり言わない性格は清美にも見られる。人気のないところでの路上ライブや、好きな人(田中)に対しては言葉数が少ないこと。一方、越前さんは、知らない人(変装中の清美)の前やはらちゃんに対しては、強い口調で話す。職場での清美のペルソナと同じ面を發揮するのである。

先ほどの清美の台詞は、越前さんが漫画に、長沼さんに対して思ったことを書いたことと、同じ内容を述べている。はらちゃんが呼ぶ呼称の「神様」「悪魔さん」のように、正反対の二人にみえても、実際は同じ面を持つふたりなのである。

善と悪は悪と善でもあること、さらに視点が違えば、正邪も変わってくるのが、『泣くな、はらちゃん』では細かに描かれている。

また、岡田はインタビューでこう語っている。

日常レベルの中の悪意であったり、普通の人が持っている狂気みたいなものにいちばん興味があるんですね。(中略)

正論と正論の闘いにしか興味がないんですよ。悪と悪ではなくて、なんでみんなそれぞれ正しいのにこんな酷いことになるんだらうっていう感じがたぶん好きなんです。

岡田が述べているように、岡田作品では、悪にも思える人も完璧な悪ではなく、それぞれの善と善がぶつかるといふ場面や設定が多く見られる。第二章で少し触れたように、バトロワ系では、なにか正義なのか分かりにくい。各々にそれぞれの正義を持っており、それが原因で各々を守るための戦いに発展する。この戦いに勝った者だけが正義となり、正義が一つに決まって、この戦いは終わる。誰かにシンクロして物語を見ていくと、一見その人が正義に見え、その人の敵は悪になってしまいかもしれないが、岡田の描くドラマでは、決まり切った善も悪も描かれるということはない。戦いによって自分にとっての悪を排除し、解決することに話の重点を置いておらず、正義がいくつもある状況でも、それを認め合うことができるという人間の描き方をしているのである。

以上の事から、正反対の性格をもつ同じ見た目の人を用いることは、一人の人間の中に良い面も悪い面もあり、視点が変われば正邪が変わるものとして描く、岡田の人間を描く手法となっていることがわかる。

* ハッピーエンド

岡田には、ドラマの終わらせ方にこだわりがあり、昔から今に至るまで変わらない。昨今

のインタビューではこのように語っている（6）。

ドラマを作っていて、見事な終わり方にしたくないとか、結論を出したくないという感じがあるんです。話が終わらないようにしているとか……。物語の終わりを書きたくないのかなあ。それでも続いていくでしょ？という感じの終わりが、今の理想なんです。

過去の岡田作品でも、このような台詞がある。『彼女たちの時代』（一九九九年）の最終話の序盤にある、主人公深美の一人語りである。「幸せそうなハッピーエンドなんて、嘘じゃないかと思う。本当は、ハッピーエンドの後が大変なんじゃないかと思う。人はずっと、ずっと生きていかなければならないのだから」。

深美は、大手物流会社のオペレーター室で、たくさんの女性と共にOLとして働いている。彼女は、越前さんのように、自分の代替がいくらでもいること、自分が特別な人ではないことを感じながら過ごしている。ドラマでは、深美とその友人である千津と次子の三人の出会いから、仕事・恋愛・家族についてのことまでを、日常の一コマとして描いている。ドラマの始めと終わりには、各回のサブタイトルに関した深美の一人語りが入るようになっていく。以下はドラマの終盤にある一人語りである。

たぶん、人が生きていくのって、おもしろくないし、かつこ悪いことだらけなんだ。ドラマチックな出来事なんて、そんなにあるわけじゃない。小さな、小さな日常が、ずっとずっと永遠と続いているだけなんだ。

（中略）

でも今、わたしは思う。この夏、千津や次と会えてよかった。同じように悩んでいる人がある、同じように答えを出せずにいる人がある。わたしだけじゃないんだ、そう思えただけでよかったと思う。それにきつと、きつと今、こんなふうにもがいてい

ることは、無駄じゃないはずだ。絶対、無駄じゃないはずだ。そう思えることができたら、例え今の自分に何もなくても。

そして、わたしは少しだけこれからのことが、楽しみになってきた。

深美の一人語りと、OLとして働いている日常が最後に映し出され、物語は閉じている。このドラマもありがちな女性の日常に焦点を当てた作品であり、登場人物のわずかな変化が物語になっており、岡田の特徴がみられる。

そして『泣くな、はらちゃん』の第九話。越前さんがはらちゃんたちを現実世界に留めておくことに不安を抱いているときの、百合子の台詞である。

百合子 「映画やアニメだったら、幸せに暮らしました、はいハッピーエンド、つ

て終われるけどさ・・・人は、ハッピーエンドの後も、生き続けていかなきゃならないから」

（中略）

百合子 「大変なのは、ハッピーエンドの後なのにね」

このドラマは、はらちゃんがまた漫画世界から出てくるという可能性を残して終わっている。越前さんが大きな成長を遂げた、きれいなハッピーエンドという仕方で終わっていない。

岡田作品で、伏線が回収されずに、視聴者が不満を持つようなオープンエンディングという形はあまり見られない。緩やかに物語を進展させ、「終」ではなく、「つづく」の文字がエンドに置かれてもおかしくないような最終回の描き方を岡田が好むことは、いくつかの作品内でも見て取れる。多くの場合、平凡な日常は永遠と続いていき、現実にはハッピーエンドというものは無い。そんな日常をドラマでもおもしろく描くのが岡田恵和である。しかし、日常系もまた、セカイ系・パトロワ系のように飽きられる時があるであろう。日常系の良さを取り込む岡田であるが、今後どのように人々に愛されるドラマを描いていくのか期待したい。

*さまざまな人間模様

岡田が描く多くのものに、「恋」が扱われることの原因が、この台詞にまとめられているように思える。以下は『最後から二番目の恋』第一〇話での千明の言葉である。

あたしはさ、いろんな人のいろんな気持ちをドラマにしたいわけ。だから恋愛ドラマを作ってるわけよ。恋愛ってなんかこう、おつかいしょ。恥ずかしいしさ、みっともないしさ、人間っぽいでしょ？ 悲しいけど、やつばなんかちよつとおかしいみたいなき、滑稽でせつなかつたりするでしょ！ あたしはね、そういうのが好きなわけよ！

恋愛を用い、人間とはどのようなものを巧みに描く。本格的なラブストーリーのように、登場人物たちの熱い思いや、恋い焦がれる状況に、視聴者が心惹かれるというわけではない。穏やかに進展していく物語を、身近に感じ、人間の本質に触れることができるような人物の描き方から、言葉にできない良さを、わたしたちは岡田のドラマから感じ取ることができる。『泣くな、はらちゃん』は、人間と非人間の恋という異質な設定であったが、恋愛ドラマのようなおもしろさ、せつなさを十分に引き出していた。そして、さまざまなメッセージ性と共に人間の生活が描かれており、ヒューマンドラマとしてもみることが出来る。本当の人間ではないけれども、感性豊かで純真無垢なはらちゃんは、とても人間らしいが、わたしたちにはちよつと引いてしまう、大げさに感じてしまうような彼の語る言葉もあった。しかしそれには、越前さんの心に、そしてわたしたちの心にも響く力があつたのではないか。「あなたが笑えば、世界は輝くんです」。そんな言葉も、観ているうちに、心に置きたくなってしまう自分がいた。

(註)

- (1) 「岡田恵和シナリオ特集『泣くな、はらちゃん』『ドラマ』35巻3号 二〇一三(平成二五)年三月 映人社
- (2) 成馬零一 『キャラクタードラマの誕生―テレビドラマを更新する6人の脚本家―』二〇一三(平成二五)年一二月 河出書房新社 18頁
- (3) 岡田恵和 『TVドラマが好きだった』二〇〇五(平成一七)年六月 岩波書店
- (4) 「テレビドラマの脚本家たち」『ユリイカ』44巻5号 二〇一二(平成二四)年 青土社
- (5) (2) に同じ
- (6) (2) に同じ 42頁

参考資料

- ・岡田恵和 『ドラマを書く―すべてのドラマはシナリオから始まる―』 一九九九(平成一一)年七月 ダイヤモンド社
- ・コミュニケーション 『はらちゃんエンディングの震災映像に5%が言及』
〈<http://www.commucom.jp/topic/?q=%E6%B3%A3%E3%81%8F%E3%81%AA%E3%80%81%E3%81%AF%E3%82%89%E3%81%A1%E3%82%83%E3%82%93&id=4a93c5c45c5d896e0ac8908c07474813>〉 二〇一五年一月 九日閲覧
- ・ドラプレ! 『泣くな、はらちゃん』8話感想まとめ・何この急展開!どんな最終回になるかますます分からなくなってきた!」
〈<http://drama-impression.info/%E6%97%A5%E3%83%86%E3%83%AC%E5%9C%9F21/6205/>〉 二〇一五年一月 一九日閲覧